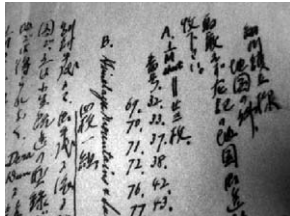


# 日本山岳会蔵資料紹介 No.6

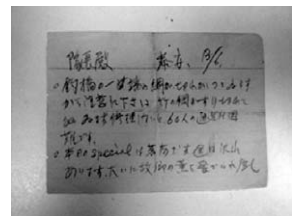
[資産番号] 259～261  
 [資料名] 三田幸夫の手紙と日記など  
 [部門名] 書簡  
 [寄贈者] 三田静子  
 [受入日] 1992年



①細川護立侯爵に宛てた手紙



②横有恒に宛てた手紙



③加藤泰安の伝言

前号に続き、第11代会長を務めた三田幸夫より寄贈された資料より、書簡関係である。細川護立侯爵へ宛てたものや横有恒や谷口現吉らと交わした手紙、1953年マナスル第1次隊遠征中のSama Base Campでの日記、キャラバン中の伝言メモ、渡航関係の公文書、ローマ字で打たれた当時の電報など、貴重な書簡が多い。下記、1931～1953年に交わされた一部を紹介する。

①は1931年2月25日付け、三田から細川侯爵へ宛てた手紙である。カルカッタ赴任中の三田へ、細川侯爵は横を通じて地図を依頼した。その地図の送付にあたり、詳細な説明をしている。

「地図の件……A・1/M=23枚、B・himalaya mountaing、Bは訳文の必要がありますので、1/Mの方が解りやすく、また一番詳しい地図と思われる……Bは四枚続き、ヒマラヤの全体を一目で見得る便利なもの、小生も愛用申して居りました……1/Mは1枚がまた16枚に分かれていて使用に一番便利と存じます。……」とあり、50ルピー 8アンナ(地図の代金)の数字も見えてとれる。

②は1913年3月22日付け、三田から横へ宛てたもの。前半では細川侯爵へ地図送付の報告、後半では母校・慶應の登高会への期待や夢を語っている。

「……日本の登山界の今の気持ちはどんなふうですか? ……パンディムについて、第一印象から希望的。2～3回試みた人もいるがみな断念している。むずかしい。高さは約2万2千、ダーズリンから眼前の雲を抜く兎型の尖峰。登高会で2～3カ月学校をすっぼかしてこられる奴はいませんか? ……ダービー競馬で当たれば船を一行のためにチャーターしてもいいし……」と、ユーモあふれる文面が続く。

③は1953年6月13日、キャラバン中の加藤泰安がノートを破って走り書きした伝言。「隊長殿 泰安 13/6 ○釣橋の一端の綱が切れかかっていますから注意して下さい……修理しないと60人の通過は困難です。○本日のspecialは茗荷です。途々沢山あります……」とある。

これら書簡にじっくりと目を通すことにより、当時の山岳界の一端を知ることができる。

なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会→所蔵資料紹介のページへアクセスすると、「会報ページそのもの」を拡大して見ることができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。✉jacshiryu102@jac.or.jp (資料映像委員会)

## ◆編集後記◆

● 図書紹介に取り上げられている『二歩ずつの山歩き入門』の著者四角友里さんを、私は勇気のある人だと思ふ。自分の思いを貫くことも、好きなことを継続していくことも、信じた道を進むことも、ときとして勇気のいることだ。

● 上高地から湖沢まで、クライマーは飛ぶようにして登っていくかもしれないが、そんな道のりを当初彼女は、2日間かけないと歩き通せなかつたと、自分で話している。力不足とみる人もいたようだが、あるベテラン編集者が、「ほかの人の2倍山を楽しめ、味わい尽くしたんだね」と話してくれたそう。山への向き合い方は人それぞれ。彼女は彼女の山を歩き続け、その10年の歳月が込められた1冊。登山者への愛あふれるメッセージが書かれている。(柏澄子)

## 日本山岳会会報 山 821号

2013年(平成25年)10月20日発行  
 発行所 公益社団法人日本山岳会  
 〒102-0081  
 東京都千代田区四番町5-4  
 サンビューハイツ四番町  
 TEL 東京(03)3261-4433  
 FAX 東京(03)3261-4441  
 発行者 日本山岳会会長 森 武昭  
 編集人 柏 澄子  
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp  
 印刷 株式会社 双陽社